
ギフト とある魔法使いの日常

日野 空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ギフト とある魔法使いの日常

【Nコード】

N9751Z

【作者名】

日野 空

【あらすじ】

『優しい魔法使い』と呼ばれている少年、シャルル・クルス。シャルルはある事情により周りの人々の記憶から忘れ去られるという呪いをかけられていた。

そんなシャルルと周りの人物たちが織り成す、時に笑えて、泣けて、感動できる物語。

伝えたい。

大事にしたい。

そんな思いを描いています。

まだまだ未熟ですが、楽しんでもらえたら幸いです。
宜しくお願いします。

第0話 プロローグ 優しい魔法使い (前書き)

楽しく読んでいただけたら幸いです。

第0話 プロローグ 優しい魔法使い

昔々、まだ魔法使いが人々に知られていた頃のお話です。

とある国に一人の魔法使いがいました。

家族や友達、他人であつてもその魔法使いは困っていれば力を貸していました。

そんな彼を、みんなは『優しい魔法使い』と呼んでいました。しかし、人々に信頼されている彼を快く思っていない魔法使いたちもいました。

彼らは、どうかして彼を苦しめようと考えます。

時には嫌がらせをしたり。

時には無茶な頼みをしたり。

彼を苦しめようとはしましたが、彼はいつも笑っていました。

嫌がらせをされては笑い。

頼まれては笑い。

そんな日々が続いた、ある日です。

魔法使いたちは、彼にある魔法を使いました。

その魔法は、かけた相手の存在や記憶を周りの人々から奪う魔法でした。

ですが、

「君たちが、それで幸せになれるなら良いよ」

それでも彼は笑っていました。

慈愛に満ちた顔で。

そこで彼らは気が付きました。

自分たちが、どれだけ醜いことをやっているかを。

自分たちもみんなのために助けになろうとしていたのに、みんなの尊敬を一身に受けている彼が気に入らないだけで。

彼に酷いことをしていた。

彼に協力するのではなく。

謝ろうとした彼らでしたが。

その時には、彼らがなぜ泣いているのか、誰に謝ろうとしているのかを忘れてしまっていました。

そして、その後『優しい魔法使い』の彼がどうなったかは知りません。

もしかしたら。

どこかで、人助けをしながら笑っているのかもしれない。

たとえ、忘れられても。

第0話 プロローグ 優しい魔法使い (後書き)

読んでいただき、ありがとうございました。

第一話 プロローグ（前書き）

読んでいただけたら嬉しいです。

第一話 プロローグ

少年と少女がいた。

少年はいつも少女のベットの横に置いてある椅子に座り込み、彼女の様子を眺めていた。

祈るように、折り紙を折っている彼女を。

少年はそういう風にしていられることが嬉しかった。

少女も嬉しそうに、いつもにつこりと笑っていた。

どんな時でも。

どんな日でも。

いつも。

笑っていた。

「あーもう！ ややこしいっ？」

苛立ちをあらわにしながら、少年は少女にならって折り紙を折っていた。だが、少年の折り紙の出来栄は、完成までは遠いとはいえ二回折っただけで皺が出来ていた。とても期待できるものが出来るように思えない。

それが本人にもわかっていらしく、苛立ちを抑えきれず途中で紙をテーブルに投げ捨てる。

その様子を少女は、面白そうに笑いながら。

「ねえ、修ちゃん。現在進行形で下手くそだね、折り紙」

「悪かったな。器用じゃないんだよ！」

「不器用でもないよね」

「どういう意味だよ？ 馬鹿にされてるのか誉められているのか分からんな」

「そつなくこなすって意味だよ」

とりあえずバランスが良いという意味だろうか　と思っただ、彼女の表情を見ればそれが、冗談であることがすぐに分かった。

少年は、一瞥しながらシニカルな笑みを浮かべた。

「うつ……、どうせ俺は不器用だよ。こんちくしょう」

少年にとって、それが今の自分にできる反撃だった。

少女は苦笑しながら、少年の顔を見つめた。

「まあまあ、そんな泣く演技はしなくていいから。不器用なのは昔かつらだし」

口調は冗談を言っているものだが、声音は本気そのものだった。

「……今ので、お前は俺の敵だということが分かったよ」

傍目には いや確実に小馬鹿にされたような発言をされている。ただ少年は笑った。

少女も一緒に笑う。

会話を楽しそうに。

そんな二人を窓辺から指す、温かい陽光が照らす。

希望ある未来を指し示すかのように。

だから。

そんな時間が、いつまでも続いてほしいと願っていた。

「ねえ、修ちゃん？」

心から、そう願っていた。

少年がああ言葉を聞くまでは。

「ちょっと……話があるんだ」

少女の口から語られる。

願いを砕く言葉が。

第一話 プロローグ（後書き）

読んでいただき、ありがとうございました。

第一話

へたくそなおりがみ、それでも思い

千羽鶴

(前書き)

読んでいただけたら嬉しいです。

第一話　へたくそなおりがみ、それでも思い　千羽鶴

「うゝ、寒い」

三月初頭。

陽の光の強さが少しづつ増してきているものの、吹き抜ける風がまだまだ冷たい。

それでも、春の兆しを見せ始めている頃あいにはなっている。そのことを証明するかのように、通りのサクラやウメの蕾が色づんできているのが誰の目で窺えた。

春の香りを感じさせる街路を歩きながら、寒さに身を震わせているのは金色の髪に空色の澄んだ瞳を持つ少年シャルル・クルスだ。体格は中肉中背だが、それでも少しやせ気味に見えた。特徴と呼べるんものは、せいぜい少し長めの髪を後ろで結んでいることだろう。

とは言っても、日本と言う国にいれば、外国人は嫌でも目立つには違いない。

だが。

彼はそれ以外にでも、目立とうと思えば目立つことのできる。

一見彼は、普通の外国から留学をしに来た少年に見える。

しかし、それは彼の表面的なステータスだ。

その実彼の正体は、かつて　つい先日まで、誰からも忘れ去られるという呪いを解くこともできず、本人の意思とは別に強要されていた『魔法使い』だ。

見た目は少年に見えるが、実年齢は一体何歳になるかは分からない。とりあえず実年齢は百歳以上だということはわかっている。

だが、そんな彼を年上扱いしない人物はいる。

と言うのいも。

「ほらほら、気の抜けたような声を出さない」

正体を知る人物の一人がこんな口調だからだ。

声を出したのは、シャルルの隣を歩く活発そうな少女だ。

少女の名前は、笹川灯里。

長い栗色の髪を、頭の上の近くでポニーテールにしている。顔も可愛い部類に入る少女だ。

体格は細身な体　華奢な体つきをしている　ように見えるが、からかうシャルルを一発で再起不能にする戦闘力を持っている。そのためか、シャルルは彼女に殴られないように加減しているのは、また別の話。

「そういわれてもなあー」

と呟きながら、シャルルはため息をついた。

「シャキツとしなさいよシャキツと！　ほら、シャルル！」

灯里は気の抜けた顔をしているシャルルに一括すると　まったく　と呟きながら自分も深々とため息をついた。

その行動　言動とは裏腹の　を見過ごすこともなくシャルルは言った。

「お前なあ……自分が今、俺になんて言ったかもう一回言ってみろ」
「なによ。あんたが悪いのに」

顔を突き合わせながら、睨み合う二人。

まるで犬の勢力争いみたいだ　と周りに人がいれば思うだろう。しかし、そのことを気にしない　シャルルの正体を知るもう一人の少女がいた。

喧嘩中の二人の間にすかさず、仲介役として割って入る噂の少女。割って入ったのは灯里とは反対のシャルルの隣を歩く明知唯だ。

日本人形みたいな長い艶のある黒髪が特徴だ。顔立ちも灯里ともいい勝負で、彼女も可愛い部類に入るだろう。

ちなみに、彼女だけはシャルルのことを年上扱いし、尊敬の目で見ている。

「落ち着いてくださいよ、シャルルさん。灯里ちゃんも、ね。せつかくの休みなんだから」

落ち着いた口調で、二人を宥めに入った。

お互いにまだ言い足りないことがありながらも、唯に言われた二人は渋々黙り込んだ。

「わかったよ」

「うーん、まだ納得がいかないんだけどな」

シャルルはそう呟いているものの、気持ちを落ち着かせるために視線を別の所に移して、ぼんやりと景色を眺め始めた。

灯里も灯里で無理やり唯の言い分に納得させ、視線を別の所に移すことにした。

唯は二人の様子を見て、落ち着いていることを確認した。だが空気はまだ気まずいもので、自由に動くには無理だ。

だから、どちらも話しかけようとはしない。

強情だな、と思いながら唯は沈痛な思いでため息をついた。

今度は、灯里はため息をこぼしたことにツツコミを入れなかったが

なぜ唯には言わない　　と言うことで、空気がまた重くなったことになったことは明確だった。

仕方がなさそうに（自分の責任だが）唯は、この空気を喚起するために　彼女にとっては　何気ない話題で気分転換をしようとした。

「それにしても、今日はありがとうございます。買い物に着いて来てくださって」

無難、な話題だが、すぐにその話題転換が失敗だったことに公開する羽目になる。

「別に気にしなくていいさ。ちょうど時間が開いていたし」

とは言っているものの、シャルルは一日のほとんどが暇だ。

これまで、ずっと旅を続けていること意外にやることがなかった。困っている人々を助けるということもやっていたが、旅をすることもなくなり灯里の家に居候をすることになってから、家から出ることはなくなった。

もちろん、灯里の母親　伊織の手伝いはやるし、父親　敦の手伝いもする。

しかしながら、彼は基本的に暇なのだ。

そのことを知っている、灯里は不敵ににやにやと笑っている。

「どうしたんだよ？」

灯里の奇妙、というよりはム力つく視線に気が付いたシャルルは尋ねた。

灯里のにやにやがさらに増す。

「いや、なんでもないよ。あんたが、ホントは一日中暇だなんて言ったりしないから」

「貴様言つてはならぬことを？ ええい、成敗してくれようぞ？」

そう言つて、灯里を捕まえようとするシャルル。灯里はにやにやしながら逃げるために走り出した。

またこうなる　　と思いながら、頭を抱えなくなりそうだった。

しかし灯里を追いかけまわすシャルルを見ながら、じゃれ合っているだけで楽しそうにしていることが窺える。唯は微笑を浮かべながら、その様子を眺めた。

気温は寒いのに、ここだけなぜか温かく見える、と感じられた。

そのまま二人は軽口をたたき合いながら、唯は様子を傍観するという形を取りながら歩いているといつの間にか目的のお店に着いた。三人は中に入ろうとした時、玄関ホールから出てくる人物に知り合いがいることに、シャルル（知り合いではない）以外の二人が気が付いた。

灯里と唯にとっては見知った人物、シャルルにとっては初対面の人影が現れた。

少年は二人の視線に気が付き、自分の方から声を掛けてきた。

「おすつ、笹川に明知」

「こんにちは、笠岡くん」

につこりとほほ笑んで唯は、声を掛けた。

「買物？」

尋ねたのは灯里だ。

「ああ、ちよつとな　　と、そちらの外人さんは？」

少年の視線は、灯里からシャルルに移った。

「ああ、初対面だね」

と愛想よく相槌を打った。

ほら、シャルル　と灯里は肘で小突きながら、シャルルに合図を送る。

「はじめまして、シャルル」クルスだ。シャルルって呼んでくれ」

「あ、こ、こつちから話しかけたのにすいません。俺は笠岡修一って言います。俺のことも修一でいいです」

慌てて修一は自己紹介をした。

どうやら年の近い外国人と話すのは初めてで、どう接すればいいのか分からずテンパったらしい。

「じゃあ、ついでにタメ口でいいぞ」

「助かる。そっちの方が話しやすい」

「だな」

そう言って二人は笑い始めた。

どうやら、男同士で繋がる何かがあったらしい。但し、シャルルが何百年も生きている人物だとは思わないだろう。

シャルルの個人情報　を知る者は今のところ灯里と唯だけなのだから。

「で、そっちこそ何やってるんだ？」

「私たちも面白い物」

「ふーん……あつ、そうだ！」

修一は何かを思いついたように掌をポンツ、と叩いた　のは、

一連の動作としては可笑しいことはない。ただ、

（今の時代、デフォルトで掌を叩く人なんているんだ……）

（俺も生きる化石だけど、こういったのもアレだよなー）

などと思っていることに、残念な（がら）修一は気が付いていない。

「なあ、これからスバルのところに行かないか？　喜ぶと思うんだ」

「森井さんのところですか？」

「おうよ。どうだ？」

「うん、行きたいな」

「そうだね。行こっか」

三人で会話をしているのは大変仲の良いことで、喜ばしいことなのだ。ただ何やら一人だけ置いてけぼりを食らった気になるのはなんでしょう。

ぽっーん、と立ち尽くしていると空しさ。

シャルルの心中には、寂しさが湧いてきていた。

シャルルはこの数百年間の経験でこういったことになっている。

しかし完全じゃないのも確かで。

呪いが解けた時に泣いた。慣れてはいても、完全な体制は持ち合わせてはいないのだ。

だから、一人ぼっちということで、寂しさが湧く。

そのことにやっと気が付いた灯里たちは、シャルルの幼子が拗ねたような表情に、意外感と戸惑い気味に後ずさった。

「あのー、元気ですか、シャルルさん？」

「うん。べつに。全然大丈夫だよ」

そうは言っているものの、声音はそう言っただけじゃなかった。

（意外と子供っぽいところもあるのね……）

（シャルルさん怖い……）

「え、えとね。森井スバルさんっていつて私たちのクラスメイトなんだよ。頭もよくて美人で、抱きつきたくなくなるくらい可愛いんだ」

「お前とは正反対の人間なんだな」

素直な感想、ではあるが言葉には棘がある。むしろ、殺傷能力がある。

まあ、「冗談？」を言っていれば元気が戻ったのだろうことが窺えた。

調子が戻ったことが分かった灯里は、

「うっさい」

いつもの調子で怒鳴って、シャルルは殴り、

「うげっ！ 骨折れたぞー！」

シャルルはわざとらしく痛がって見せた。

もはやお約束になっているのは日常茶飯事となっているのだが（それを知るのはこの二人だけ）、唯も元気が戻ったことに胸をなでおろした。

それでも、限度を見極め笑いながら言った。

「シャルルさんも灯里も、そろそろ演技はよした方が良いでしょう」

「そうだね。シャルルと冗談を言い合っても面白くないし」

唯には言っていることが、すぐに冗談であることを見破った。言葉でそう言っている割には、楽しそうだったからだ。

彼女は少々、紡ぐ言葉が素直ではないのだと、唯は思った。

（まったく……素直になればいいのに）

唯の思いとは別に、灯里はまた素直ではないことを言った。

ただし、シャルルの秘密を暴くような言葉を含めて。

「これで本当に、『優しい魔法使い』って呼ばれていたってのが疑いたくなるわね」

彼女は冗談半分で言ったのだろうか、

「灯里？」

しまった、と思った時には遅かった。

「は？ 『優しい魔法使い』？ 魔法使いってどういうことなんだ？」

三人は顔を見合わせ、どうするか考えた。

「あはははっ、何言ってるのよ。『優しい魔法使い』ってなに？」

「そ、そうですよ！ 私たちそんなこと、一言も言ってますんよ」

「いやでも……」

と何かを言いかける修一を、

「そうそう、何でもないんだって！！」

シャルルが言葉を被せる形で無理矢理に封じた。

灯里と唯は隠そうとしているが、正直シャルルは別に正体をばらしちゃっても構わないと思っている。しかし、そうしないのはばれ

たらばれたでちやはやされるのが面倒というわけではなく、二次被害として灯里たちに迷惑が降りかかるのが嫌なだけだ。

灯里に言うことは言うのに、意外（彼の通り名なのだが）と灯里と唯のことを考えているシャルルだった。

そのシャルルに封じられたが修一はそれでも、三人の様子を怪しんでいたが、すぐに、まあいいや、と呟いて気持ちを切り替えて尋ねた。

「あの、シャルルさんはどうですか？」

「はい？」

突拍子な発言に、疑問形を疑問形で返してしまった。

だってそうじゃん。質問の意図がわからないからだ。

「いや、シャルルさんもお見舞いにくですか？ 他人ですけど、アイツのことだから喜ぶと思いますよ！」

「そうだな。俺は灯里たちに着いてきたから、灯里たちが行くんなら俺も着いていくよ」

「やることもないしね」

「うつさいぞ！ そうだ。病院に行くんだったらついでに灯里は、頭でも見てもらえばいいんじゃない？」

性根が悪い笑みを浮かべながら、冗談を言う。

「どういう意味よ！」

それに食って掛かるように、鬼気を混じらせながら踵を返す灯里。いつもの様子に仲裁役として割り込もうとしていた唯は、思わずため息を漏らす始末である。ただ、修一だけはそうとはみなさず、

「仲良いな。二人とも」

明かな、爆弾の投下だ。

「よくねーよ！！」

「よくないよ！！」

そう言っているものの。

息の合った反論に、やっぱり仲が良いなと思った。

とんとん、とドアに手の甲を打ち付ける音が、部屋の中にへと響き渡った。そのことに気が付いた部屋の住人は、

「はい、どうぞー」

鈴の音に似た澄んだ声で、返事を返した。

ドアを修一が開け、その後に続く形で灯里、唯、そしてシャルルが入っていく。

部屋の中に足を踏み入れたシャルルの視界に飛び込んだのは、色鉛筆の白色よりも白い空間だった。

壁から机、さらには荷物が入っているであろう鞆までもが何もかも白かった。せいぜい白くない物と言えば、病室内のカードを入れて見える黒色のテレビぐらいなものだ。

「なんか寒いね」

灯里の声で、肌寒いことに気が付いた。窓を見てみれば喚起のためか窓は開けられ、少し寒い空気が頬を撫でる。

そんな空間の中にでも、一際目立つ少女がベッドの上で腰を上げていた。長いクリーム色の髪が目立っている。これまた可愛いらしい女の子だった。

ただ灯里や唯と違って、背は低く顔立ちが子供のような印象を与えてくる。

シャルルは、この子が森井スバル、と小さな声で呟いている。

「おつす。元気にしてるか？」

「うん、元気だよ。それに　わあ、灯里ちゃんに唯ちゃんだ。久しぶり!!!」

「久しぶり。元気そうで良かったよ」

灯里は微笑みながら言った。

「体調はいいんですか？」

唯は灯里と同じようなあいさつを交わして、無難なことを尋ねた。
「うん、見ての通り！　元気百倍スバル？」

二人はスバルの例えにしては子供っぽい発言に笑った。

修一も一緒に笑っていることに気が付いたスバルは、恥ずかしそうにそっぽを向いた。この流れを変えたいという思いが湧いた。そのための話題転換として、スバルは気になっていた灯里たちの背後に立つシャルルに視線を送った。

「で、後ろの方は？」

シャルルは愛想よく修一の時と同じように、自己紹介を始めた。

「はじめまして、俺の名前はシャルル・クルスだ。シャルルって呼んでくれ」

「わー、外人さんだー！！ 初めまして、わたしは森井スバルって言います。こちらこそよろしくおねがいします」

「こちらこそ」

歯切れの良い会話に、二人は笑いあった。

「修ちゃんすごいねえ。知り合いに外人差がいるとは思わなかった」

「俺の知り合いじゃないぞ。灯里たちのだ」

「灯里ちゃんたちの？ どうやってしりあったの？」

困った。

聞かれたが。言えない。

灯里と唯の二人は、どここの部分を省いて説明しようかと頭を悩ませた。がその悩みを解決させたのは、当の本人のシャルルだった。

「二人の間にちょっとした悩みがあつて、それを解決したんです」

「そうなんですか！ でもそれって、友達って言つより、恩人なんじゃ？」

「そうかもですね。でも、自分が友達だと思っていれば、友達ですよ」

「確かにそうですね」

「でしょ」

と言つて笑いあった。

「じゃあじっさい、灯里ちゃんになにをしたんですか？」

「え？ それは……」

灯里は口ごもる。

先ほどは上手く誤魔化したか（シャルルが）、実際に何があったかについても語れない。

いくら、シャルルが命の恩人であって、灯里と唯の仲を元に戻した人であつてもだ。

「そ、それはね。わたしたち仲が悪くなつてて、たまたま道を通つていたシャルルさんに助けてもらつたんだ」

「へー、そうだったんだ」

「そういえば、夏の頃から折り合いが悪くなつていたもんな。それをシャルルが、解決したのか。一筋縄じゃいかなかったでしょう？」

「うん、まあね」

言葉を濁しながら、シャルルは受け応えをした。

二人の賞賛の視線はありがたいが、半分は本当であとのもう半分は伝えていないのが心苦しい。彼　シャルルは、『優しい魔法使い』という名の通り、嘘をつくことには慣れていないのだ。

嘘をつくことになっている人間は信用できないが、嘘をつかない人間も信用できない。だから、適度に嘘をつくという決断に至るための、その耐性も彼にはないのだ。

その結果、シャルルの態度に何の疑問を持たない二人の言動は、少しばかり心が痛むものとなるのだった。

そんな場の空気を払拭するかのように、タイミングよく何かを思い出した。

「あつ、そうそう。頼まれた物買って来たぞ」

出会った時からずっと持っていた、紙袋を差し出した。

「ありがとう、修ちゃん」

「そういえば、買い物をしに行つていたって言ってたな」

呟きながら、修一が手渡した袋の中を見ると、中に入っていたのはどこにでも打つてそうな色とりどりの折り紙だった。

「うん、これこれ」

「折り紙……？」

「はい。折り紙です」

スバルはニコリとほほ笑みながら、突きつけるように見せてきた。

「折り紙ってなに？」

「あ、知らないんですか！」

スバルは声を大きくさせ驚いた。

「ああ、うん。長い間生きてるけど、今まで一度も見たことない」

「ながいあい……だ……？」

（しまった？）

淡々と語った後に、自分のすぐに失言に気が付いた。

「あの、それはどういう意味ですか？」

「あ、いや、その……何でもないんだって。何でもないっていうか、ほらあれだよ。長い間海外で暮らしていたからさ」

焦りつつ気たつぷりの表情で手をぶんぶんと振って、シャルルは否定の意を示した。あまりにも反応が白々しいというか、怪しいので信じてもらえるかどうか心配だ。

「ああ、そう意味ですか。納得しました」

（ふー、どうにか誤魔化せた、な）

大きく息を吐いていると、隣から灯里が肘で横つ腹を突かれた。

眉の間に焦りの顔を浮かべている。

「（シャルル、本当のことを話さないようにしなさいよ）」

他人にどうにか聞き取れるかどうかの小声で、灯里はシャルルに言う。シャルルは苦悶の表情を浮かべた。

「仕方がないだろ。話を合わせようと思ったら」

苦々しく、シャルルは語った。

「しっかりしなさいよ。私たちよりも、場数を踏んでるはずでしょ。誤魔化すのだって得意のはず」

「んなわけあるか！」

「シャルル、どうしたんだ？」

どこか怪しみながら、修一が尋ねてきた。

またもや、焦り顔で言い訳じみたことを語る羽目になるシャルルの目尻には、涙が浮かんでいる。

（あーもう、何で俺ばかり）

「何でもないです。ほんとーうに、何でもないんです！」

「そうか……」

渋々頷いているが、修一は、なんかさっきから何かをはぐらかされているような気がするな、と呟いている。

どきつ、とする発言にシャルルは苦笑うしかなかった。

ここまで、その言葉を何も言わず聞いていた唯は、そろそろ話の軌道修正に入らないといけないな、と思って口を開いた。どうせならもっと早くに、軌道を戻してほしかったが。

「そつえば、いつごろ退院するんですか？」

（ナイス？）

灯里は自分では完全に收拾が付かなくなったことに気が付いていた。その事態をどうにかするべく救世主として現れた唯に、賞賛の眼差しを送った。

「ん、早ければ新学期からは学校に行けるよ」

「そうなんですか。じゃあ、また同じクラスになれたらいいですね
唯の声音は明るい。

「……うん、そうだね」

だが、スバルの声音はどこか元気がないものだった。

「……、」

シャルルはその様子を訝しみながら眺めた。

自分と同じ、何かを隠していると思いながら。

夕暮れの帰り道。

修一は病院に残り、唯とは買い物を終えた後途中で別れた。シャルルと灯里は会話をしながら帰路についていた。

しかし、会話の内容は少し可笑しなものである。

「どう思った？」

「はい？」

前置きなしの急な質問に、灯里は戸惑った。

少々間抜けな声を出してしまっただが、仕方がない。

「何がどう思ったの？」

首を傾げながら、彼女は尋ねた。

「いや、なんかあの子隠してそうなんだよね。俺とは別の何かを」

「隠してる……って、森井さんが？」

シャルルは首を動かして頷いた。

シャルルは冗談は言うが、基本的に嘘はつかない。そういう所を知っている灯里は、

「でも、森井さんが嘘をつくなんて信じられないよ！　今まで一度も嘘をついたことがなしさ」

「あのな。お前はそんな奴を信用してんのか？」

「そんな奴なんてひどいよ！　森井さんは良い人だよ！」

あのなあ、と呟きながらシャルルは語った。

「嘘をつかない奴なんて、信用できるかよ。嘘つてのはな、相手の裏の気持ち　本音なんだ。いくら森井さんが良い人だと思っても、裏が判らない以上信用できねえよ」

「でも、信用できるもん！」

低く唸りながら、彼女はシャルルを睨みつけている。

シャルルは髪を掻きながら、呆れかえっていた。

「まあ、お前があの子のことをどう思っくいようが勝手だが、信用できねえよ。会話の最中あの子、ところどころ表情が暗くなってたしな」

「うそおっ？」

「気が付いてなかったのな」

先ほどよりもシャルルは、呆れかえりながらため息をついた。
「で、でもそんな風には」

「見えなかった　って言うんだろ？　けど、体調がどうか聞いてた時だけ元気がなかったぞ」

必死に抗議をしようとする、灯里の言葉に割り込むように言う。

「け、けど……」

何かを言いかけるが、口ごもって何を言い出そうとしているのか聞き取れない。

しかし、どうにか決心をつけたらしく彼女は言った。

恥ずかしい顔をしながら。

「シャルルも良い人なのに、嘘をつかないよ。だから、私は森井さんを信用する」

「……、」

話している内容とは少し脱線していると思ったが　予想外の言

葉に、そのことに気にせずシャルルは驚いた。

そして、込み上げてくる笑いを抑えきれず、

「あはははっ？」

と大きく笑い出した。

「な、なによ？」

小馬鹿にされているようで、腹が立つ。

だが、恥ずかしさから上手く反論できない。

「いや、何でもないよ。とりあえず　ありがとな」

「えっ、ええ？」

「ありがとな」

これまで見たことのないくらいの、笑顔を向けられ灯里は困惑の表所を浮かべる。恥ずかしくなって顔を背けるが、彼の言葉の真意が少しでも出てくる事が出来たような気がした。

だから、ちよっただけ嬉しかった。

「そつだな。信じれるよな」

茜色の空。

その空の彼方見ながら彼は、

「……、」

「結局、自分がどう思つかだよな。分かってるくせにいやはや、初めて嘘ついちまったな」

だが、灯里はそれを否定した。

「うん、そうじゃないよ」

彼女の言葉に、シャルルは耳を傾ける。

「間違いだって認めたんだよ。だから、嘘をついてないよ」

その言葉に呆気にとられたシャルル。今度は、恥ずかしさからシャルルが顔を背けることとなった。

でも。

「確かにそうだな」

笑っていた。

自分を救った一人、灯里の言葉に頷きながら。

「なあ、その話本当なのか？」

シャルルたちが帰った後、修一は重苦しい表情をその顔に浮かべながら、スバルに尋ねた。スバルは修一の態度に顔色一つ変えず、むしろ笑顔で答えた。

「うん。手術は受けられるようになったんだけど、成功するかどうかはわからない」

その笑顔がひどく悲しそうで、強がっているようにしか見えなかった。修一は耐え切れず、目を逸らそうとするが、この場から逃げ出そうとする自分に活を入れ彼女の顔を見た。

「成功する可能性つてとても低いんだろ。それでもやるのか？」

「うん」

眩暈がしてきそうだった。

それでも、意識を必死に保って、

「他に方法はないのかよ？」

「……ないよ。手術するしか、ね」

「っ？」

修一は齒噛みした。

それしか方法がない、ということではなく力になれない自分だ。

「大丈夫何とかなるよ」

「なんとかって……」

そんなに樂觀的に考えられはさすがない。

スバルだって、苦しんでいるのは分かる。

けれど、

「お前はそんな賭けみたいなことを、信じられるのかよ？」

「信じるとかそんなんじゃないよ」

スバルは告げる。

それにスバルは、笑っていた。

どこまでもきれいに笑って、

「修ちゃん。私はね」

修一の不安な思いを掻き消すかのように、

「私はね生きたいんだよ」

「……、」

「友達みんなと話したり、遊んだり、遠出したり、笑ったり、走ったり、勉強したりしたいんだよ。だから、私は生きたい」

「……、」

「修ちゃんたちと一緒にいたい」

スバルの真っ直ぐな瞳。

その瞳に宿す光が、眩しすぎて。

修一には力資することが出来なかった。

(こんな時、誰かを助けしてくれる魔法使いがいてくれればいいのに)

強くそう思った。

自分で何かをやるうとはせず。

雪が降っていた。

三月だというのに。

まだ降っても可笑しくはないが、ここまで降り積もるとは思わなかった。

「ちよつ、進めないんだけど？」

「まあ、一メートルも積もってるからね」

と冷淡に突っ込むのは、二階の窓から様子を眺めている灯里だった。

シャルルはその道を一人歩き始めた。

「くそつ、雪が靴の中に入ってきて足の感覚が……」

解けた雪が足に染み渡り、今にシャルルは凍えた俺そうだった。

「ていうか、なんで俺がこんな事を……」

と呟いているが、彼が外に出ることはもはや必然だった。

シャルルは、笹川家の居候の身である。

住むところを提供させてもらっているのだ、頼みごとを聞かなければ家に置いてもらえないのは当たり前だった。でないと、追い出される（笹川家の人々は性格上、そんなことはやらないのだが）。

「んで、わざわざなんでこんな時にマ ニーちゃんを……」

適当に鍋に野菜でも放り込んで煮詰めればいいものを、どうせ作るんだった本気でと言う灯里の母親紅羽わざわざ買いに行く羽目になったのだ。

別段、どんな材料でも彼女に何を作らせてもおいしいのだが。

「まあ、仕方がないよな。居候だもんな」

そう納得さるしかなかった。

そんなこんなで、一人（灯里は寒くて無理、だということ以来な

かった)で寒さに我慢し続け三十分ほど歩くとやっとの思いでスーパーマーケットにたどり着いた。

灯里が付いているところを見ると、こんな時にでも営業中らしい。「すごい根性だな」

啞然とした表情で、感想を吐露した。

言うでけ言つと、これ以上外にいたら本当に凍えて倒れてしまいそうなので、スーパーの中に入った。

やはりというか、考え通りスーパーの中は従業員以外に人がいなかった。

「あれ、シャルル？」

「ん？」

自分と従業員以外に誰もいないと思ったその時だった。背後から誰かに声を掛けられた。

振り返つてみると、立っていたのは修一だった。

「お、修一！ お前もおつかい？」

「おお、そっちもか。お互いに人使いの荒い、家庭だな」
「ばあつ、と明るい笑みで答えた。」

「ああ、俺は違う。俺は居候だ」

「居候？ ヘー、ホームステイか何か？」

詰めいるように尋ねてくる修一に、シャルルは少し後ずさったが、話が弾んでいくにしたがつて、自然と笑みがこぼれてくる。

「あー、まあね」

「ヘー、そうなんだ。なあ、どこに住んでんの？」

「灯里の家。実はそこが受け入れ先でさ」

「どうなんだ、ホームステイって？ やっぱり、文化が違ったりして戸惑ったりする？ 嫌でも、日本語上手だしなあ」

「まあ、慣れないこともあるけど楽しいかな。というより、逆にない文化の違いを楽しんでるよ」

「ヘー、そうなんだな」

どこか関心の目を向けられているのはなんなんだろうか、と思う。

「外国に行ってみたいのかな？」

「んーっと、どうだろう。言ってみたけど、言葉が通じないしな」
苦笑いながら、修一は答えた。

「それは心配いらないって。俺が通訳してするから」

シャルルは自分の胸板をドンと叩いて見せた。

「マジでっ？」

修一は著利害のあるシャルルを、芽を輝かせながら見た。

「ただし、バイト料はもらうけどな」

「うわー、こすいな」

「はははっ、冗談だよ」

その冗談に、二人は大きく笑い出した。

「あはははっ？」

「冗談もいい加減にしてくれよな」

人のいない空間で目立つ二人。

だが、人のいないおかげで、二人を怪しむ者はいなかった。

笑いが収まってくると、シャルルは気になっていたことを尋ねた。

「なあ、一つ聞いてもいいかな？」

「え、なにを？」

「……あーっと、別に嫌だったら答えなくていいから」

言いづらそうに彼は、前置きを言った。

「お、おう」

「あのさ、森井さんは何を隠してるんだ？」

修一は目を見開いた。

驚きを隠せずに、硬着している。

「いつから、気づいてたんだ？」

どうにか口を動かして聞き返した。

問われているのは、自分なのに。

「あの子の表情で分かった。なんか、隠してるなーって」

「……、」

修一は答えない。

「なあ、あの子は何を隠してるんだ？」

「それは」

言いかけたところで、言葉を飲み込んだ。

言っていいのだろうか、と疑問を抱いたから。

「いいよ。無理しなくてもさ。さて、買い物に行くか」

話をここで切り上げ、食品コーナーに向おうとする彼の背中を眺め、修一は口を開く。この人になら、言っても大丈夫だと思ったからだ。出会ってわずか、そう確信できるようになるには、早すぎると思ったが。

「実はさ」

彼の口から。

どうすることもできない、現実が語られる。

「そういうことか」

修一の話聞いたシャルルは、重苦しい顔でどう言っべきか考えた。

「大変だな。成功する可能性が低いなんて」

「ああ……」

彼の重苦しい表情は変わらない。

シャルルも其れ以上は、深い言葉を言えない。

「俺は幼馴染で長い付き合いだから分かるし、シャルルさんは勘がいいから気が付いたと思うけど、あいつ……絶対に無理していると思う」

彼の言葉は予測ではなく断言だった。

「けど、あいつそれを隠して……」

「……、」

「シャルル……俺はどうすればいいのかな？」

意見を求める声だった。

シャルルは頼りになるからこそ、発した言葉だった。

そう思っていた修一だったが、次の瞬間予想もできなかった言葉が自分に向って投げ出されてきた。

「どうしたいんだ？」

突拍子もない言葉に、修一は首を傾げた。

「なにを？」

「だから、お前は」

「お、れ？ いやいや、俺にはどうすることもできないって！」

話に耳を傾けていた彼は、どうしようもないため息をついた。

「本当にそう思ってるのか？」

「え……？」

「そうだとしたら、それは間違いだ。いや。大間違いだな」

シャルルは真面目な顔できっぱりと告げた。

「どんなに小さなことでも、出来ることがあるさ」

「でも」

「俺は昔からそうしてきた」

「……、」

「友達のためなら、どんなに小さなこともやってきた」

シャルルは淡々と話を続ける。

「苦しいことがあっても、辛いことがあっても、痛いことがあっても」

俺は手を差し伸べてきた。だって、そいつらの苦しみ、辛いこと、

痛いことは俺にとってもそうだったんだから」

「大事な友達だったのか」

「おう。でも、それだけじゃないぜ」

「……？」

「他人でも助けてきた。悲しんだ顔をしていれば、話を聞いて助けた」

修一はシャルルの言葉に深く息をのんだ。

彼の信念めいた思いを聞かされ、驚いているのだ。

「まあ、全部忘れられちゃったんだけどな」

「それって、どういうことだ？」

言おうとした言葉は、シャルルの言葉にすぐに掻き消された。

「なんでもない、なんでもない。はははっ！ 今言ったことは忘れてくれ！」

「……？」

修一は首を傾げて、シャルルを怪しく見ている。やっぱりこの人は、何か重大なことを隠している、と思いながら。

自分たちとは別の何か。

そう例えば、本当の姿、とかを。だが、それを修一は尋ねようとはしなかった。自分が今はなしていることは、自分の意思で話している。

けど、この人は絶対に話すことはないだろう。

おそらく、尋問めいて問い詰めたとしても。

それ以前に、今聞いてしまえばこの関係が壊れてしまいそう。

「手を伸ばせば届くのに。手を伸ばさないのは、きっと臆病だからだ」

唐突に彼は呟いた。

「えっ、なに？」

「何でもないよ」

シャルルはまた、何かを笑って誤魔化した。

「とにかく、修一にも何かできることがあるよ。どんなに微力でも助けになるか分からなくても 思いは届くはずだから」

「それでも俺は何もできないよ」

修一は自嘲気味そう語った。

「大丈夫だ！ 自分自身を信じる！」

「……うん」

シャルルの言葉に、修一は弱弱しくだが頷いて見せた。

ふとそこで、今までの話とは全く関係ないのだが思ったことを尋

ねた。

「それにしてもさ。シャルルって本当に俺らと同年代なのか？」

「え？」

「なんて言ったらいいんだろ。んーそうだな。なんていうか、考え方が大人びている気がする。だから、ホントに歳が同じくらいなのかって」

「はははっ！ 一緒に決まってるんだろ！」

「そうだよな。何言ってるんだろ俺は」

遠からず近からず。

修一の言ったことは半分当たっている。

修一はそのことに気が付いていなかった。

一週間が経った。

気温は完全に春に変わり、肌寒さはなくなっていた。

ポカポカとした気温に誘われ、居間で日向ぼっこをしていたシャルルに灯里は話しかけた。

「そういえば明日だったなー」

「何が？」

シャルルはソファに座り込みながら、聞き返した。

「森井さんの手術」

「明日、か」

（修一の奴。どうしてるかな）

天井を仰ぎ見ながら、ぼんやりとスーパーマーケットでの出来事を思い浮かべた。

そんなシャルルの様子に、違和感を感じた灯里は尋ねた。

「何か気になることでもあるの？」

「いや、べつに……」

「そう」

「……、」
「……、」

無言の時間。

その時間は長くは続かなかった。

静寂にしびれを切らした灯里は、

「何か言いなさいよ」

「何でもないって」

「嘘つかなくていいって。シャルルの顔見てたら、なんか言いたげだもん」

「そんなことは……」

「聞いたよ。この前雪が降ってる日に、シャルルが笠岡君に言ったこと」

思わぬ不意打ちに、肩がびくりと震えた。

どうやら灯里はすべて知っているようだった。

「ねえ、シャルル？」

「は、はい」

「今回はなんで深く足を突っ込むわけ」

それは、と言いかけたところでシャルルは口の動きを止めた。

自分がこれから語ろうとすること、話してもいいのかどうか迷ったからだ。

それでも、迷っている自分の縛りを解いて、話し出した。

「弟がいたんだ」

「シャルルに？」

ああ、と答えながら話を続ける。

「俺以上に優しい奴で、いつもにこにこ笑ってる弟なんだ」

「へー、シャルル以上にね」

彼女はにこやかに笑って相槌を打った。

だが対照的な表情でシャルルはけどさ、と続ける。

「重い病気にかかって、幼い頃からずっとベッドの上での生活だったんだ」

「すごくいい弟なのに、なんでそんな仕打ちを受けるのか納得がいかなかった」

シャルルの表情がだんだんと暗くなっていく。

「だから、俺は弟を助けるために魔法使いになっただ。でも」
「でも？」

「その夢を叶えようと、もうすぐ手が届きそうなところで俺は灯里も知っている魔法にかけられて近づくことが怖かった」

灯里は何を言っているのかすぐに理解した。

魔法の名前は『非在化』。

この世のすべての人から、魔法をかけた人物のすべての記憶を消すといった魔法だ。シャルルはそれを掛けられ、数百年の間、誰にも覚えられず生きてきた。

ずっと一人ぼっちで。

自分たちと巡り合うまで、この不幸に彼は一度もなくこともなく生きてきたことを彼女は知っている。

「だから、俺はその直後に姿を消した。多分忘れられただろうな、弟にも」

「……、」

「だからなのかな。修一には後悔してほしくないんだよ」

灯里は何も言えなかった。

シャルルの言っている本音に　ただ、シャルルの願いが叶ってくれれば、と思うばかりだった。

スバルの助けになりたい。

スバルの力になりたい。

けれど、修一は自分の力のなさに直面していた。

悔しさばかり募って、どうすることもできなくなっていた。

「くそぉ……」

スバルは修一に向って笑っていたが、その心中では不安や絶望が渦巻いているに決まっている。それを見せないように、無理をしていることも 自分を強く見せようとしていることも 全部全部、分かっている。

理解しているけど。

届かないし、なんの助け舟にもならない。

『どんなに小さなことでも、出来ることがあるさ』

あの少年の声がよみがえってきた。

『手を伸ばせば届くのに、手を伸ばさないのは、臆病だからだ』

シャルルは笑って自分を奮い立たせようとした。

突き放しているように見えて、その実優しく友人を導こうとしていた。

『どんなに小さなこと……』

何ができる？ 自分にと修一は語りかける。

けれど、考えても何も思い浮かばない。

暗礁に乗り上げるだけ。

考えれば考えるだけ、深みにはまっていく。

答えがほしかった。

どうするべきかの。

「くそっ？」

手を振り払い机に叩きつけた。

がん！ という音を響かせ、手には痛みが走る。修一はその痛みを気にもせずもう片方の手でくしゃくしゃと巻き上げる。

と、その時だ。

テーブルから袋が落ちた。

「……？」

袋を開き中身を確認するとそこには、折り紙があった。これは、また買ってきて、と頼まれていたものだった。別に変ったものではない。けれど。

修一は今までの悩みが、一気に消え失せ呟いた。

「そうだ。出来ることがあるじゃないか」
その眼にスバルと同じ光を宿しながら。

「悩みは吹っ切れたみたいだな」

シャルルは笑みを作りながら、公園の足元に映し出されている映像を眺めていた。映し出されているのは、修一の様子だ。

「どうにか自分で解決できたみたいで良かった」

「とか言いつつ、いざとなったら助け舟を出そうとしてたでしよ」

背後から声を掛けられ、肩がびくりと震えた。

背後に立っているのは灯里だ。

「あのなあ、脅かすのを止めてくれるか？」

「別にいいじゃん」

軽く笑い飛ばしながら、彼女は呟いた。

それでもシャルルは無駄だとわかりながら、反論を言うだけ言っ
た。

「いや、びつくりするから」

「まあまあ、気にしない気にしない」

「あのなあ……」

「心配になったお母さんに頼まれて、渋々迎えに来たあたしに感謝してよね」

「……、」

そんなこといわれは反論が出来なくなった。

「つか、反論はやっぱり無駄だった、とシャルルは思った。

シャルルの苦悶の表情に、満足した灯里は軌道を元に戻すために尋ねてきた。

「で、調子はどうなの？」

「いい方向に行ってるよ」

「これも、シャルルのおかげだね。助言を出したのは、シャルルだもんね」

灯里の言葉に、シャルルは首を横に振った。

「違うさ」

「え？」

「自分で答えを出したんだよ。手を伸ばせば届く距離なんだ。ただ、修一は臆病になってただけだ」

「……、」

「あいつはそれに、自分で気が付いたんだ気が付いたんだ。だから、俺は何もしていない」

灯里はシャルルの言葉ににやりとさせた。

「ふーん、謙遜しなくてもいいのに」

「別にそんなんじゃないって」

「あつそ。まあいいや 帰ろうよ」

「まあ、待てよ」

「ん？」

「せっかく自分で答えを見つけたんだ。サービスしないとな」

「どうせするつもりだったんでしょ」

灯里の言葉に、赤面するシャルル。ここで、白々しくも嘯いた素振りを見せてみればいっちょ前なのだが、彼にはその技術はない。

その様子を、灯里は満足げに見た。

満足した灯里はもうこれ以上茶々を入れることはしなかった。

その代わりに、シャルルが行おうとしていることをしっかりと見据えた。

朝が来た。

カーテンを開いて、窓の外を眺めるとまだ暗く、地平線の彼方に太陽の頭が昇り始めているところだった。

「少し、早起きしすぎたかな」

スバルは自分以外いない部屋の中でぼそり、と呟いた。

（今日、か……）

手術が行われる日。

わずかな可能性しかない、大きな賭けだ。

次に目が覚めた時、自分は生きているか分からない。

そう思うと、不安になって。

考えれば考えるほど、不安が増してくる。

けれど、

生きたかった。

真っ直ぐな思いで、そう思った。

だが、それと同時に不安が自分を支配する。

不安から逃れるためか、彼女は窓の外の景色を眺めることにした。

景色が目に入った　その途端、自分は弱いな、と思った。

いざ、ことが目の前に来ると、目を背けることしか出来ないなんて。

現実と向き合おうとはしない。

修一の目の前では強がって見せた。

それならできる。

けど、やっぱり本当の意味では強くなれない。

トントン。

窓から音がする。

その音に呼び戻されるように、スバルは我に返った。

「スバル、開けてくれ」

窓を叩いていたのは、驚くことに修一だった。

ここは一応、病院でしかも三階なのだが、と突っ込みたかったが今はそれどころではない早く、修一を部屋に入れないと落ちてしまふ。

勢いよく窓を開け、修一に早く入ってくるよう声を掛けた。

「修ちゃん、なにやってるの？」

危なげに入ってきた修一に、スバルはいきなり怒鳴りつけた。

「いや、まあ……すまん」

「……もう」

と呆れた様子を見せたが、無理をしてまで自分に会いに来てくれたことに感謝した。

「もうこんな事しないでね」

「二度とすることはないよ。というか、もうしたくない」

「ならいいや。でさ、何か用事？」

ここまで来たのだから、なにかあるには間違いない。

「ああ。これを渡そうともってな」

「なに？」

スバル嬉しそうに顔をほころばせ、修一は紙袋をあさりながら一纏めにされた鶴 千羽鶴を取り出した。

「ほら」

そう言っで、スバルに手渡した。

「ありがとう」

受け取りながらスバルはお礼を言った。

手に持っているのは、確かに千羽鶴だ。

見栄えは、ひどく粗かった。

でも、修一が一生懸命作ったことは見て取れた。

彼は下手くそだが、いつも一生懸命に追っていることは知っていた。

口に言わなくても。

「言われたんだ」

「え？」

突拍子もない発言に、眉まで動かしてスバルは驚いた。

「シャルルさんに。たとえ小さな力でも、スバルの力になれるってな」

「……、」

「俺にはこんなことしかできないけど、これも立派な力だ。だから、お前の助けになれると思ったんだ」

「……、」

「それでもやっぱり非力だよな」

修一は言いかけた。

苦く笑いながら。

「まったく……下手くそだな」

「うるさえよ」

「ふふつ、冗談だよ。すごく立派だよ」

「……スバル」

「あのね、修ちゃん。ずっと、私強がってた」

瞳から涙があふれる。

「強く見せようと、心配させないように」

「……、」

「だけど、無理だった。だって今、泣いている」

手の甲で涙をぬぐいながら、話を続けた。

「けど、修ちゃんのおかげで、本当に強くなれたと思う。ありがとう、修ちゃん」

「おう。スバル、生きてくれよ。みんな、そう願っているんだから」
「うん」

スバルは修一の言葉に、きれいに笑っていた。

奇跡、とでしか表現できない。

スバルの手術を担当した、医師たちは口々にそう言った。
なんでもミリ単位の手術を、手元が少しも狂わずに成功させたのだ。

「いやー、良かったよ。手術が成功して」

「うん、これもすべてお医者さんたちと修ちゃんのおかげだよ」

「おいおい、俺は何もしてんないぞ」

そうは言っても、スバルはまともに聞き入れなかった。

「ううん、修ちゃんが千羽鶴を折ってくれたからだよ」

「つつても、運任せだけだな」

「そうだけどね。たしかに、下手くそな折り方でご利益があるのかどうか不安だったけどな」

「なあ、怒っていいか？」

「冗談だよ」

と笑い飛ばすも、修一には、

「冗談に聞こえん」

まあ、当然の反応といえばそうだろう。

「つつたく……」

疲れたように息を吐くと、顔を見合わせ二人して笑った。

そんな二人のやり取りに決着が着いた頃、そのタイミングを見計らっていたように三人組 シャルルたちが現れた。

「森井さん、手術成功おめでとう」

と言ったのは、花束を持った唯だ。

普通は退院する時に花を渡すものだが、とシャルルはその旨を話したところ唯は こういう時だからなんです と語った。

要するに気持ちなんだろう。

「ほんと手術が成功して良かった。おめでとう」

「唯ちゃん、灯里ちゃんありがとう」

いつものにこやかな笑顔で彼女は受け応えをした。

「うっん。私たちは何もしてないよ。それに、何かしたのはシャルルだもん」

「それって？」

スバルは言葉の意味が分からず、首を傾げた。

疑問は灯里の代わりに、答えたのは修一だ。

「ほら、アドバイスの話だよ。シャルル、ありがとう。あの時、あの言葉を言ってくれなかったら、ずっと手をこまねいていたと思うよ」

さらに彼は話を続ける。

「正しいかどうかなんて関係ないんだ。ただ、大事だから守ろうと手を伸ばして、手を掴んで、助ければいいんだな。そうすれば、きっと思いは届くはずなんだ」

「いや、俺は何もしてないよ。最後の最後、行動したのは修一だからな」

「シャルル、謙遜しなくても……」

「いいんだよ。頑張ったのはお前ら二人なんだから」

「シャルル……」

につこりと笑う彼の顔が眩しすぎた。

修一にはもう、言うべき言葉が見つからなかった。

「あの、シャルルさん。本当にあなたって何者なんですか？　なんで、俺たちにここまでしてくれるんですか？」

ただ、これだけは尋ねたかった。

本当にここまで、自分たちの力になろうとしているのかと。

どうしても。

シャルルは少し考えた。

（もう、隠さなくてもいいか）

そう、結論付けると。

「んー、それは」

シャルルは満面の笑みをこぼしながら答えた。

「ただの『優しい魔法使い』さ」

第一話

へたくそなおりがみ、それでも思い

千羽鶴

(後書き)

読んでいただき、ありがとうございました。

第一話 エピローグ（前書き）

読んで頂けたら幸いです。

誤字脱字の指摘や感想、募集中です。

第一話 エピローグ

色とりどりの紙。

意味のない、何にもないように思えるけど。
きっと意味はある。

だって。

一枚一枚が。

人を魅了する。

笑い。

愛情。

喜び。

希望。

未来。

勇気。

何を思つかは人それぞれだ。

けど、それを人々に与える人になりたい。
そうなってくれるようにと。

一枚一枚に思いを込める。

一つに集め、千羽に思いを繋げる。

みんなに思いが伝わりますように。
いつまでも祈るよ。

笑ってくれますようにと。

心から千羽鶴に。

いつまでも。

いつまでも。

いつまでも。

第一話 エピソード（後書き）

読んで頂きありがとうございました。

第二話 プロローグ 空の声 (前書き)

読んで頂けたら幸いです。

誤字脱字の指摘や感想を募集中です。

第二話 プロローグ 空の声

どこまでも、広がりを見せる空。

青く染まり、時に赤く染まり人々を魅了するそんな場所。

そこには少年の夢があった。

いつか少年の父親と一緒に働きたかった場所。

憧れや希望に満ちていた場所。

でも。

「お父さん……」

だけど、そんな素晴らしい空は少年の父親を奪ってしまった。

もう帰ってくることはない。

あの空の向こうの先に、連れ去られた。

少年の夢はそこにあつたのに。

少年のすべてを奪った。

「僕もそっちに……」

足を一歩踏み出した。

場所は小学校の屋上。

少年の足先には何も無い。

ただの足場のない空間だ。

もし飛び降りれば、もうこの場所に戻ってくることは出来ないだろう。

頭上から少年を見つめる視線が合った。

それは、誰にも見えない姿。

けれど、どうしても伝えたい思いがあった。

その人は届きもせず、聞こえもしない声を出しながら涙を流している。

少年に届いてほしいと願いながら。

伝えてほしい。

そんな翼じゃだめだと。

君の背中にはほかに素晴らしい翼があると。

どんな場所にも、飛んで行ける翼があると。

誰か。

誰か。

伝えてください。

私の息子に。

第二話 プロローグ 空の声 (後書き)

読んで頂きありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9751z/>

ギフト とある魔法使いの日常

2012年1月12日23時08分発行